

人間廃回：回126M

126 群馬県立高崎高等学校 鉄道研究部

私は何者か。そんなことを私に訊くな。ほっといてくれ。俺なんかと話せば、君まで変な目で見られるじゃないか。

きっかけは夏の話だった。私のあばら家は海水浴場に近いが、その輝く夏の舞台に貧相な私のような姿は今も昔も定かではない。そんなある日、あの方を見てしまった。守りたくなる仕草、純粹さを忘れぬ瞳、あどけなさを残す可愛らしい顔、少女のように艶やかな白い肌、僕のような低俗者にも優しい性格。その全てに惹かれてしまった。

その日からあなたの姿が頭に焼き付いて離れない。あなたが近所の古びた喫茶店で生計を立てていると耳にした私は、わずかばかりの薄給とボロボロの参考書を手にして毎日通い詰めた。

「合格したら、きっと想いを伝えるんだ...そして、一人前の男になって、一緒になって、目一杯働いて、必ずあの娘を楽にしてみせる！」

都心部の予備校から帰る。あなたの隣で眠る、そんな満たされた姿を想像しながら2100型京急電車に揺られて眠る。都会では珍しい転換クロスシート。それは、ちょっとの贅沢。身寄りもお金もない僕の、唯一の楽しみさ。

目が覚め、ホームに足を着ける。鼻につく潮風が心地よい。

家が近づいてくる。いつも眺めているこの海で泳ぐ日も近いのかなと、少しだけ思った。明日も頑張ろう。

家庭があって、夢があって、輝かしい未来が待っていて...

そんな日々が僕にも訪れると思っていた。

ねえ、どうして、どうしてあなたは、あなたは、行ってしまったの。ああ、逢いたい。逢いたい。僕を狂わせたのは紛れもなくあなただ。そうやってまた今日が終わっていく。ほら、また涙が零れた。

「...罪な奴め」

惨めな、しかも愛も知らぬ老人は今日も煙草に火を点け、元から心許ないその財布をさらに空にする。